

書 評

只腰親和・佐々木憲介編
『経済学方法論の多元性：歴史的視点から』
(蒼天社出版、2018年)

中 村 隆 之

経済学方法論は、学派間の対立、あるいは主流派に対する非主流派からの批判という文脈で、ともすると不毛でネガティブなものになりかねない。しかし、本来それは、深い洞察力による発見、見えにくいけれどそこにある何か、それを他者に伝えうる形にする局面を対象とした、たいへんにポジティブなものである。いや、経済学方法論のそうしたポジティブな面にしか私自身の興味がない、といった方が正確だろう。以下、このポジティブ面に着目しながら—つまり私自身の関心に偏りつつ—、『経済学方法論の多元性』を紹介していきたい。

本書は、経済学史の研究者を中心に2006年に組織された「経済学方法論フォーラム」の二作目の研究成果である¹⁾。各章のタイトルと執筆者（敬称は「氏」で揃えます）は、以下の通り。

- 第1章 経済理論における因果関係と相互依存関係
—シュンペーターはどのように考えたか—（佐々木憲介氏）
- 第2章 存在論はなぜ経済学方法論の問題になるのか
—方法論の現代的展開—（原谷直樹氏）
- 第3章 宗教・哲学・経済学
—J. プリーストリーにおける自然哲学と道徳哲学—（松本哲人氏）
- 第4章 数理経済学者たちの数学導入に対する認識
—ジェヴォンズ主義、マーシャル主義とエッジワース—（上宮智之氏）
- 第5章 経済学実験の位置付け（江頭 進氏）
- 第6章 1830年代イギリス統計運動における経済学的方法的刷新
—経済学と統計学はどのような関係にあったのか—（久保 真氏）

1) 第一作は『イギリス経済学における方法論の展開：帰納法と演繹法』（昭和堂、2010年）である。

- 第7章 ウェイトリのカタラクティクスとスミス分業論の関連（只腰親和氏）
- 第8章 現代経済学における方法論的対立—マクロ経済学を中心に—（廣瀬弘毅氏）
- 第9章 「経済人」という人間本性概念を乗り越える
—ヴェブレンの経済学リハビリテーション・プラン—（石田教子氏）
- 第10章 政府の「なすべきこと」と「なすべからざること」
—ケインズはムーアとバークから何を学んだのか—（中澤信彦氏）

本書は共同研究の成果ではあるが、全体として一つのメッセージを発することを目的としているわけではない。未読の読者は、編者（只腰氏）による「序」による各章紹介を参照しつつ、自分の関心がある章から読めばよいだろう。以下、章順に、私なりの読み方を示していこう。

1. 「資本主義」の微かな手触り：シュンペーター

シュンペーターの『理論経済学の本質と主要内容』（1908）は、ワルラスの一般均衡理論なので、経済現象を相互依存関係として捉えている。一方、『経済発展の理論』（1912）は、企業者による新結合が原因となって経済変動が起こるので、因果関係として経済現象を理解しようとしている。そこで、シュンペーターの方法をどのように統一的に理解すればよいのか、という問題提起が今まで数多くなされてきた。考えを変えたのか、変えていないのか？ 実用主義的なのか、道具主義的なのか？ 佐々木氏の結論は、シュンペーター独自の実用主義的アプローチである、とされる。

ここで詳しく論の運びを追うことはしないが、佐々木氏の議論は堅実で、説得力があることは間違いない。しかし、もしかすると読者は、議論の最初で躓くかもしれない。なぜシュンペーターの方法論を問題にするのか、という点においてである。

シュンペーターの方法論をあれこれ論ずるのは、彼の捉えた資本主義の本質が意味あるものだと示すためである。企業者の新結合（言い換えればイノベーション）こそが資本主義の本質であるというシュンペーターの命題は、共感も呼べば、反発も呼ぶ。資本主義を理解するための欠くことのできないピースだ、偉大な洞察だ、と感じる人もいるだろう。一方、そんなものは本質ではないし、経済動態の原因をなすなどとは恣意的だ、特定の心理で経済現象を説明したと勝手に言い切っている「お話」に過ぎない、と感じる人もいるだろう。こうして意見が対立するからこそ、見えにくいものを表に出そうとしているからこそ、その示し方でよいのかという次元での議論、つまり方法論上の議論が生まれるのである。

さて、ではシュンペーターは方法論の次元で自説を強化することができたのだろうか？ シュンペーター独自の實用主義的アプローチは、利いているのだろうか？ これはかなり微妙な問いだ。ある概念や理論を使うことの正当性をその有用性に委ねるならば、有用ではないと言い張る人を説得することは難しい。故に、シュンペーターの資本主義の本質論は、分かる人には分かる（分からない人には分からない）というレベルを脱することは難しい。私自身は、シュンペーターが資本主義を捉えるためのかけがえのない何かを提示してくれたと考えている。よって、シュンペーターの議論をたんなる「お話」にしてしまいたくはない。だが、それを方法論の次元で正当化するとすると、はなはだ難しいのである。微かな手触りしかないものを理論の土俵に乗せる困難さは、主流派に疑問を抱く感性を持った人々に共通の経験ではなからうか。

2. 存在論的コミットメントを問う：ウスカリ・マキ

ローソン（およびバスター）の「批判的实在論」は、経済学方法論に重要な一石を投じた。社会を対象とした研究は、帰納と演繹しかないならば行き詰まりにしかならない。そこに、「批判的实在論」は、アブダクション（仮説形成）を駆使して根底にある構造的メカニズムの存在に迫ることができる、と主張する。この建設的な主張には魅力があり、日本でも邦訳などを通じて紹介されてきた。

しかし、同じく「存在論」を基礎にして経済学方法論で多くの研究をしているウスカリ・マキ（Uskali Mäki）については、日本ではあまり知られていない。原谷氏は、日本ではおそらく初めて、マキの研究の意義を明らかにした。

マキは、特定の実在があるから、そこに向けて経済学の研究を進めよ、という意味で「実在」を主張しているわけではない。経済学者は、明示的にせよ、暗黙にせよ、対象である経済について何らかの「実在」を想定しているはずなので、それを明るみに出す必要がある、と主張しているのである。研究者に想定されている「存在論的コミットメント」を問うことで、その経済理論の持つ意味を明確にできるし、別の想定をする研究者との対話も可能になる、というわけである。

有名なフリードマンの道具主義（仮定の非現実性は問題ではない）についてのマキの見解を参照しよう。マキは、「仮定の非現実性は問題か」という問いから、次のように問いを変える。

…マキは、問いを「仮定のどのような非現実性がどのように問題となりうるか」と精緻

化する。すなわち、経済学を含むあらゆる科学理論は、その実在そのものを描き写して現実と完全に一対一対応する記述ではない以上、何らかの点で実在とは異なり、その意味では非現実的な要素を必ず含む。問われるべきは、それがどのような意味で実在と異なり（現実性の種類）、その相違がどのような目的・手段によって生じ（仮定やモデルの存在論的役割）、その非現実性によっても損なわれない実在との関係はどのようなものと経済学者が考えているか（存在論的前提へのコミットメント）、といった問題群なのである。（57ページ）

このように考えることで、フリードマンの想定する何らかの実在を浮かび上がらせるのである。

その経済学者の存在論的コミットメントを問うというマキの方法は、フリードマン以外にも適用される。そして、その方法は、自身の考えを整理するためにも、また異なる考え方との対話を進めるためにも、大いに意味がある。それは、「見えにくいけどそこにある何か」を表に出そうとする試みである。

3. 機械的人間像と神の御業：プリーストリー

Joseph Priestley (1733-1804) は、イギリスの聖職者（ただし主流でない非国教徒、三位一体を否定するユニテリアン）であり、唯物論哲学、自然哲学、道徳哲学において数多くの著作を残した。自然哲学（自然科学）においては酸素の発見者の一人と言われている（酸素の発見者を誰か一人に特定するのは難しい）。ニュートンに代表される自然哲学の方法を人間社会にも適用できると考え、その結果、プリーストリーは人間を観念連合で動く機械と見なすことになる。自由な国制の主張や奴隷制に対する批判をするが、その根拠は幸福機会の平等が神の摂理であり、それによってこそ全体の幸福に帰結するという神学的功利主義である。スミスのように経済のメカニズムの解明に基づいているわけではない。当時の啓蒙知識人としてはそれなりの重要性を持った人物であるが、経済学の分野から特段注目すべき点があるとは、私には思えない。

松本氏の論文は、プリーストリーという人物の思考を哲学的必然論・宗教的立場・自然哲学・道徳哲学に渡って、全体的に捉えた労作である（私に正確に評価する能力はないが、そう感じられる）。しかし、その経済学的内容も、自然哲学との関連による方法論的内容も、私にはどこかピンと来ない。理由は二つある。一つは、人間を観念連合による機械と捉えることにある。この単純な人間像からは、「見えにくいもの」が最初から排除されてしま

う。もう一つは、幸福機会の平等が最大幸福に繋がるという主張に根拠が示されていないことである。

プリーストーリーに対照するため、ケインズ「自由放任の終焉」を引いておこう。

…世界は、私利と社会的利益とがつねに一致するように天上から統治されているわけではない。世界は、現実のうえでも、両者が一致するように、この地上で管理されているわけでもない。啓発された利己心は、つねに社会全体の利益になるようにはたらくというのは、経済学原理からの正確な演繹ではない。また、利己心が一般的に啓発された状態にあるというのも本当ではない。…²⁾

私はこのケインズの立場に共感する。よって、プリーストーリーの道徳哲学から我々が何かを受け取るとすれば、彼にないものを追求するべしということだろう。人間は単純な機械ではないので、いかなる環境において啓発された利己心を身につけうるかを探求しうる。私利と社会的利益は自然には一致しないので、両者を一致させる制度と政策はいかなるものであるかを探求しうる。

4. 経済学に数学を導入すべきか？：エッジワースとマーシャル

1870年代以降、いわゆる限界革命と呼ばれる経済理論上の革新があり、経済学に数学を導入する動きが出てきた。イギリスにおいて数学導入に積極的だったのはジェヴォンズである。経済は数量の世界であるから、すべてを数量的に表現するべきであり、数学で表現された方が明確な思考を展開できる、とジェヴォンズは考える。一方、数学導入に消極的だったのはマーシャルである。マーシャルは数学の有用性は認めつつも、つねに現実との対応を見失わないように注意しなければならないとし、数量化できないもの、数学モデルに反映されていないものに配慮した。そして、数学を自身の思考のツールとして使うとしても、他の人に伝えるときには数学ではなく図や言葉によって表現すべきであるとした。

上宮氏の論文は、エッジワースがジェヴォンズに近いのか、マーシャルに近いのか、という問いを立てる。この問いに対する答えは、経済学史研究者のなかでも意見が異なる。エッジワースにはジェヴォンズに近い数学推奨の発言もあるし、マーシャルに近い数学抑制の発

2) Keynes, J.M. (1926), *The End of Laissez-Faire*, the Collected Writings of John Maynard Keynes, vol.9, pp.287-8. (宮崎義一・伊東光晴編『ケインズ・ハロッド』（世界の名著69）中央公論社、1980年、151ページ、強調は原文イタリック）

言もあるからである。両極をよく知るエッジワースを題材にすることにより、数学導入の意味を浮かび上がらせようというのが、上宮氏の狙いである。

さて、エッジワースがジェヴォンズに近いのか、マーシャルに近いのか。上宮氏の答えは明確である。代表作である『数理精神科学：道徳科学への数学適用にかんする一試論』（1881）の頃までを初期とすれば、初期は数学導入に積極的で、ジェヴォンズに極めて近かった。しかし、その後、過度な数学利用に警戒を促すマーシャルとの交流を深めることを通じて、数学は思考の補助手段に過ぎないというマーシャルの立場に転じた。つまり、初期はジェヴォンズ主義者で、後期はマーシャル主義者というわけである。エッジワースの立場の説明として、全く矛盾がなく、説得力がある。

周知のように、後の経済学は、マーシャルや後期エッジワースの慎重論を完全に捨て去り、まさしく数学化する方向に進んだ。しかし、それはもちろん問題含みである。○○というモデルと△△という仮定から、現実のある特徴が反映された結果が出てくるというだけでは意味がない。なぜ○○というモデルを選択するのか、なぜ△△という仮定を置くのか、その一つ一つに現実との慎重な往復が必要なのに、それを欠いたまま、数理モデルの結論と現実が繋がっているだけで、何らかの現実的な意味のあるモデルだと考えてしまうのである。もちろん数理モデルを操る最先端の人々は、モデルの特性も仮定の意味も分かっているだろう。だから、モデルや仮定をおいた理由、理論の意味を彼らは言葉で説明できる。だが、その理論を別の人があれこれ応用する段階では、それを見失っていることが多い。

数学を背景に退けて言葉で説明せよと言ったマーシャルの、そして後期エッジワースの姿勢は、現代においても（いや現代においてよりいっそう）重要なものになっている。

5. 「実験」は経済学を自然科学にするのか？

経済学は自然科学と違って実験ができないとこれまで考えられてきた。だからこそ自然科学と違う方法論が必要であった。しかし、近年、様々なかたちで経済学において実験が行われるようになってきている。江頭氏の論文は、経済学において実験ができるようになることで何が変わるのかを明らかにしている。

実験が難しい段階における経済学は、特定の理論の目線で現実を見ることしかできなかった。その理論で現実が捉えられない場合、それでも結構捉えていると強弁するか、捉え切れていない部分を補助仮説によって説明していくか、あるいは理論が示す理想と現実の距離を埋めるために何らかの政策を提言するか、であった。どの方向をとるにせよ、元の理論自体を修正する力は働かない。ゆえに一貫して理論優位であった。

だが、経済学にも実験が導入されてきた。実験室で被験者に選択させたり、被験者どうしで行動させたりするもの。被験者が何らかの判断をする際に、脳がどのように働いているかを観察するもの。ある政策が有効かを、新薬の効果を確かめる対照実験のように、実際に複数に試してみるもの。対照実験に当たるものが偶然行われている事例を見つけ出すもの。コンピュータ・シミュレーションで主体がどう行動すると集団としてどのような振る舞いをするかをいろいろと検討するもの、などである。

実験が導入されることによって、経済学はどう変わるか？ 江頭氏の答えは明確である。経済学は自然科学に近づくのである。それは言い換えれば、従来の（妥当性が問われなままの）理論優位が崩れるということである。これからの経済理論は厳密な反証可能性を求められ、反証されることで元の理論を修正することになるだろう。

さらに江頭氏が注意を促しているのは、経済学における理論の規範的な役割についてである。完全競争均衡は効率性の観点から望ましいので、現実が理想から離れているなら、理想に近づけるべきだ（市場をより完全競争に近づけましょう）という形での理論の使い方である。江頭氏は、二つの可能性を指摘する。第一は、実験によって従来想定されていた合理的経済人の想定は否定されたので、新しい人間行動の一般理論を打ち立てるという可能性。新しい行動理論に基づいて理想を確定し、理想と現実の差を埋める形で何らかの提言をするというやり方は変えないというもの。第二は、個々人はこのように行動しているという想定からミクロ的に組み立てていく方法自体を止めるという可能性。この場合、全体としての振る舞いを価値的に評価するという新たな問題が出てくる。

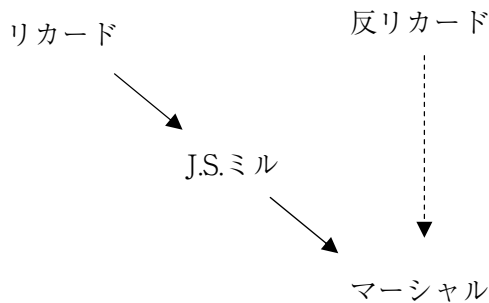
このように経済学に実験が導入されることによる影響は非常に大きい。「実験的手法の本格化は、精密な理論とあやふやな実証という経済学のあり方を大きく変えつつあるが、それ以上に経済学のパラダイム転換をもたらすものである」（168-9ページ）という江頭氏の主張も説得的である。

実際、経済学において長らく続いた理論優位は揺らいできているようだ。無用の権威を追放するという意味で、それは歓迎すべきことであろう。だが、一つ懸念を述べておきたい。「実験できないものは排除する」という方向に進む可能性があるからである。例えば、シュンペーターの資本主義の本質論やヴェブレンの長期文明論は、それが正しいかを実験できない。そういった見えにくい何かを「実験できないから経済学のなかに入ってきてはいけません」といって拒絶するならば、豊穡な何かを失っている気がするのである。

6. 19世紀の経済学形成史を豊かにする：リカード系と反リカード系

久保氏の論文は、イギリス科学振興協会の統計部会の設置（1833年、第3回ケンブリッジ大会）をめぐる様々な人々の意図を明らかにしている。ベルギーの統計学者ケトレが大きな役割を果たしており、本論文では彼がメインである。しかし、このテーマが持つ重要性を理解するためには、統計部会の設置に力を注いだイギリスの人々の方に注目した方がよい。マルサス、ジョーンズ、バベッジ、ヒューウェルであり、彼らは正統派（リカード）経済学に批判的で、リカードよりもよい経済学を打ち立てるという意図を持っていたのである。この反正統派の集まりは、「リカード→J.S. ミル→マーシャル」と続く正統派の流れを理解する上でも注目に値するのである。

この点は、久保氏の2006年の論文「ケンブリッジ・ネットワーク：リカード後イギリス経済学の伏流 1823-63」（『経済学史研究』48(2), 67-83ページ）に詳しい。この論文で久保氏は、リカード系と反リカード系を明確にし、19世紀の経済学形成史を理解する豊かなアイデアを提供している。



実線の矢印で表された「リカード→J.S. ミル→マーシャル」が、普通に言われる正統派の系譜である。しかし、この系を理解するには、反リカードの集まりにも注目しなければならない。反リカードの人々は、リカードの階級対立観に対して階級調和観を、理論重視に対して事実・経験の重視を訴えた。このリカードに対する批判があつてこそ、J.S. ミル、マーシャルがあるのである（だから右に寄っていく図にしている）。

久保氏のイギリス統計運動についての論文は、反リカードの集まり（ケンブリッジ・ネットワーク）の動きとして理解することで、たいへん興味深く読むことができる。

7. 素人が口を出すな：ウェイトリ

Richard Whately (1787-1863) はイギリスの経済学者で、カタラクティクス (catallactics: 交換の学) という用語を最初に使ったという。彼は、経済学が「交換」に対象を絞ることによって一つの独立した学問領域になったということを強調して、カタラクティクスという用語を使っているのである。ウェイトリの場合、この交換の学にはスミスの分業論も含まれる。スミスの経済学をプルトロロジー (富の学)、限界革命以後の経済学をカタラクティクス (交換の学) と位置付けたヒックスのよく知られた用語法とは異なるので、注意が必要である。

さて、只腰論文によれば、ウェイトリはスミスの分業論を継承したのだが、「交換」という観点のみに集中するため、スミスの交換性向といった人間本性に遡った洞察の部分は捨象しているらしい (231ページ)。私はここでウェイトリという経済学者に興味を失うのだが、さらに只腰論文を読み進めると、もう一つスミス分業論との関わりが述べられる。スミスは、分業が進むことにより幅広い考え方ができなくなるという問題を指摘した。それと対照的に、ウェイトリは、富の増大とともに民衆が知識を手にしたと思ひ込み、本当は専門的な学問に素人である民衆が口を出すようになるという問題を指摘している。カタラクティクスとして一つの専門的な学問になった経済学に、十分な知識もない素人が幼稚な理論を振り回して参戦してくるのは問題だ、と言いたいらしい。

ウェイトリの気持ちはよく分かる。経済学にはいろいろな考え方があるとはいえ、あまりにもお粗末だろうという議論が平気で出てくるのは現代にもよく見られることだ。だからこそ、ウェイトリと同じ気持ちを持った経済学者たちが、経済学の ABC はこうですよ、あなたの議論は ABC が分かっていませんよ、といった本をたくさん出している。適切な批判であることも多い。だが、私にはこんな気持ちもある。経済学の ABC なんて、そんなたいしたものかな？ むしろ、これが ABC ですと言っている人は、実は狭量なのではないかな？

もちろん学問の基礎は必要である。ABC の解説は必要だ。しかし、学問の細分化、専門化していくことで視野が狭くなる危険性には、十分な自覚と警戒が必要である。

8. ケインズを三度たたいて骨抜きにする

1930年代の大不況で、働きたくても働き口が見つけれない失業者があふれた。その現実を説明する経済理論がケインズ『一般理論』(1936) だった。市場には需給均衡メカニズム

が備わっているから、資源が余っていれば価格が下がり、そのうち余らなくなる、という神話を打ち砕いた。「ケインズ革命」である。だが、この革命は幻だった。ケインズを三度たたいたら、元もこんなにすこくなかったというほどの神話が復活していたのである。

① ケインズ『一般理論』→新古典派総合ケインジアン

新古典派総合ケインジアンは、総需要不足に対応するために政府の政策が必要であるという点はケインズを引き継ぐ。しかし、その理論的基礎はワルラスの一般均衡理論であり、ケインズとは相容れない。このパンチが、第三打の KO パンチを呼び込む。

② 新古典派総合ケインジアン→マネタリズム（フリードマン）

市場に自動調整機能は「ない」とするケインジアンから、「ある」とするマネタリズムへの転換。考え方の大転換ではあるが、理論的基礎そのものへの攻撃ではない（理論的基礎は共有し、LM 曲線の形状といった実証的な側面に対立）。

③ マネタリズム（フリードマン）→新しい古典派（ルーカス）

長期においては市場が働く（自然失業率）というフリードマンの考え方を純化。ワルラスの一般均衡論に立つならば、いついかなる時も需給は均衡するはずだ（非自発的失業は語義矛盾）、となる。

こうしてケインズ革命への三連打を見ると、一番派手に見える②は実はクリティカルではなく、③を呼び込んだ①が実は決定打だったことが分かる。①でケインズと違う経済観（理論的基礎）を招き入れてしまったことが持つ意味。廣瀬論文は、そこに注目する。

ケインズと新しい古典派の経済観の違いは、272ページの図が分かりやすい。ケインズは労働者・企業者・投資者がそれぞれ異質な行動原理に従っていると考えている。だが、新しい古典派は、労働供給を決め、貯蓄（投資）を決める代表的個人からなる経済を考えている。ケインズと違い、同質的なプレイヤーが労働市場にも資本市場にも現れるのである。この経済観は、ルーカスがミクロ的基礎を徹底したからではなく、それ以前に一般均衡理論という枠組みを採用したこと（①）に由来している。現代のマクロ経済学は、反省なしに後者の経済観を採用しており、そこに大きな問題があることを、廣瀬論文は示唆している。もちろんケインズ研究者として大いに共感する。

ケインズの独自性はどこにあるのか、現代のマクロ経済学が行き詰まっている原因はどこにあるのか、に関心のある読者は、是非読んでほしい。

9. 経済学を進化的科学にする：ヴェブレン

ヴェブレンは、当時の主流派（新古典派）経済学が採用していた「経済人」という人間理解を乗り越える必要性を感じていた。経済人の想定は、人間の動機を金銭に還元できる量的なものとして捉えてしまう。だが、それでは現実の人間は捉えられない、とヴェブレンは考えた。貨幣的ではない複雑な動機、制作者本能や他者と張り合う気持ちなどが作用しているのが人間というものである。所与の目的に向かって動いているというより、自ら目的を創造したり、あるいは他者に惑わされて変な目的を追求したりしてしまうのである。

そこでヴェブレンは、人間行動を理解する基礎に本能と習慣を置く。そして、その本能の展開の仕方が技術的条件によって変化する歴史を見る。制作者本能が主として働く時代もあれば、張り合う心が優勢な時代もある。歴史は単線ではなく、古い習慣が社会のある部分に根強く残ったり、かつての習慣が先祖返りしたりする。それはよい目的に向かっていく「進歩」ではない。よいも悪いもない絶えざる変化＝「進化」である。量的概念では捉えられない、質的な変化と言ってもいい。

石田論文は、このヴェブレンの基本姿勢を明確に、平易に説明している。「見えにくいもの」を捉えようとするヴェブレンの方法に、私は深く共感する。

10. 崇高な目的と世俗の手段の区別：ケインズ

中澤論文は、ケインズの学生時代の論文「エドモンド・バークの政治学説」を、ケインズの経済学および思想の全体にどう位置付けるか、という問題に取り組んでいる。ケインズがバークの政治学説のうち、政治は抽象的理念や高尚な理念を目的とするものではなく、従って原理原則にこだわらずに便宜の追求すべきであり、いっそう重要な目的のための手段と位置付けるべきだ、という考え方の部分を高く評価した、ということは論文を読めば明らかである。だが、その影響の程度については、評価が分かれるところである。

中澤氏は、ケインズが『自由放任の終焉』（1926）においてバークを参照していることを手がかりに、バークからの影響が大きかったこと、持続的であったことを示す。ムーアの哲学は崇高な目的を与えてくれるが、手段を明示してくれはしない。手段の部分で、とくに政府の役割という問題に関しては、バークの上述の便宜主義を採用し続けた、というのが中澤氏の主張である。

バークからの影響について、それを便宜主義の部分に限定するなら、おそらく異論はほと

んどないだろう。パークの思想（とくに保守主義と呼ばれている部分）の中身をケインズがどう考えていたか、に踏み込まないならば。もし踏み込むとすれば、ケインズの回想「若き日の信条」における次の有名な部分が問題となる。

文明というものが、ごく少数の人々の人格と意志によってうち立てられた、巧みに人をごまかし狡猾に保持された規則や因襲によってのみ存続されうる、うすっぺらい頼りにならない外皮であることに、[かつての私たち＝ブルームズベリーの仲間たちは] 気づいていなかった³⁾。

ここをどう理解するかは、ケインズ研究者のなかでも議論のあるところである。私はこの問題をこの場で論じることにはできない。代わりに、パークの便宜主義に関わり、実のところ上の問題とも繋がっていると思われる一つの問題を提起しておきたい。

それは、崇高な目的と世俗の手段を区別するという考え方につきまとう問題である。この考え方は、ケインズにおいては、各人の目的に国家は干渉せず、目的のための手段を広く保障するというアメリカのリベラリズムではない。となると、崇高な目的を定めるエリート集団がいることになる。政治を世俗の便宜と（低く）位置付けるのも、このエリート主義の系である。エリート主義だから即悪いのではもちろんないが、エリート主義を正当化する何かはどこにあるのだろうか？ 政治を便宜と言いつ切るからには、この問題を考えないわけにはいかないのである。

おわりに

この書評は、学問の最先端を熟知した者による著作への適切な評価・位置付けではない。そもそも私にはその能力がない。私にできることは、その著作（各論文）の切り拓いている議論の世界に読者を誘うことである。今回、私はそのような書評を書いた。しかし、私の能力と関心には限界があり、適切に議論の場に読者を導けていない部分がある。とくに第3章と第7章は、情けないほどできていない。この点、深くお詫び申し上げる。

経済学をやっていれば、何をテーマにするにせよ、方法論が関係してくる。だから、方法論をベースに経済学史の研究者たちが議論を重ねることは、たいへん意義深い。編者、執筆者の方々に感謝するとともに、「経済学方法論フォーラム」の活動が続き、第三作が出るこ

3) Keynes, J.M. (1938), *My Early Beliefs*, the Collected Writings of John Maynard Keynes, vol.10, p.447.
(宮崎義一・伊東光晴編『ケインズ・ハロッド』(世界の名著69) 中央公論社、1980年、126ページ)

とを期待したい。

